

平成 23 年度「東北大学学校ボランティア」活動報告

畠山 祥史
東北大学教育学部 4 年

鈴木 学
東北大学教育学研究科博士課程後期

本報告は、2003（平成 15）年度より活動を続けている「東北大学学校ボランティア」（以下、学校ボランティア）の 2011（平成 23）年度の取り組みを報告するものである。

本年度の学校ボランティアは、震災により活動開始に遅れが生じることとなった。しかし、最終的には例年並みの活動学生数のべ 29 人（実数 26 名）の参加を得、各々充実した活動が行われた。学校ボランティア事務局（以下、事務局）では、川内北キャンパスにある SLA サポート室の協力を受けながら、情報の配信方法の改善等に取り組んだ。それによって、より効率的で開かれた募集が可能となり、事務局と活動学生の関わりも増えたことが本年度の成果である。一方、来年度以降の課題として、活動学生への積極的・専門的なサポートの検討、広報活動の範囲のさらなる拡大、および、学校ボランティアの安定した運営に必要な事務局の体制改善の 3 点が提示された。

1. 「学校ボランティア」概要

（1）実施組織体制

「学校ボランティア」は、教育学研究科水原克敏教授を顧問とし、同研究室内に設置されている事務局によって運営されている。事務局は学生のボランティアによって組織され、現在、局員数は 2 名（教育学部 1 年・4 年各 1 名）である。運営にあたっては、全学教育学習支援事業を進める SLA サポート室（室員 2 名）に川内北キャンパスにおける窓口業務等でサポートを受けながら、事務局活動が行われている。

（2）募集内容

事務局で活動学生を募集しているボランティアは大別すると以下のようになる。

- ①仙台市教育委員会（以下、仙台市教委）による「学生サポートスタッフ事業」に関わるボランティア（小・中学校中心）
- ②学校ボランティア事務局に直接依頼があるボランティア（高等学校等を含む）

（3）募集対象・方法

事務局では、東北大学の全学生を対象として、主に①授業内告知、②ポスター掲示、③

メーリングリストの活用の3つの方法でボランティア活動学生の募集を行っている。

本年度は、①については、例年ご協力いただいている全学教育教職科目の2授業および教育学部で行われている講義において告知をさせていただいた。②については、全学部の学生がいる川内北キャンパスを中心にポスターの貼りだしを行った。③については、ボランティアの募集依頼の情報を定期的に配信する「メーリングリスト」を設置し、情報配信を希望する学生にはこれに登録してもらった。メーリングリスト登録学生数は、表1の通りである。

表1. 学校ボランティアメーリングリスト登録学生学部構成表

学部	人数(人)	大学院	人数(人)
文学部	5	文学研究科	1
教育学部	10	理学研究科	3
経済学部	3	工学研究科	1
工学部	1	大学院合計	5
理学部	4		
農学部	6		
医学部	1		
学部合計	30		

(4) 事務局活動の年間の流れと活動内容

事務局活動の一年間の流れは、表2の通りである（本年度は震災の影響により活動学生の募集開始時期に遅れが生じている）。下記5点は、事務局が年間を通して行っている活動学生へのサポート内容である。

表2. 事務局による広報その他の活動の年間記録

月	活動
5	事務局員募集（～6月）
7	活動学生募集開始
8	学生サポートスタッフ研修会（対事務局）（3日）
10	授業内告知による学生募集
2	感謝状贈呈式・活動報告会（9日）

①学校側へのボランティア内容の詳細確認・調整

学生が興味を持ったボランティア活動があった場合、その依頼について、事務局が学校に直接連絡をとり、ボランティア内容の詳細について確認を行う。その際、学生から疑問や要望があった場合は、それに応じた質問や調整を行っている。

②説明会

あらかじめ仙台市教委の先生方から、学生サポートスタッフ事業の概要や、ボランティア活動時の注意事項、加入する保険の詳細等の説明を受けている事務局員が、これら

の内容をボランティア活動学生に対し個別に説明する機会を設けている。説明会では事務局員からの事務的な説明だけではなく、ボランティア活動学生のボランティア志望動機や活動に対する不安等のヒアリングも行われる。

③活動学生の登録

説明会の際に活動学生に記入してもらった所属や連絡先等の情報を、仙台市教委に「登録学生情報」として送付する。この手続により、仙台市教委がその活動学生を正式に活動者として登録し、ボランティア保険等が適用されることになる。

④定期的なメール連絡・ヒアリング

活動学生に対して、報告書の提出や交通費の手続き等に関する事務的なメール連絡を定期的実施している。また、事務局に出入りのある活動学生に対しては、ボランティア活動の近況等に関してヒアリングを行っている。

⑤感謝状授与式・活動報告会（※詳細は 2（3）参照）

年度末に、仙台市教委の先生方を招き、活動学生への感謝状授与式を催している。これと同時に活動報告会を実施し、活動学生同士が意見交換できる機会を提供している。

2. 平成 23 年度「学校ボランティア」活動状況

（1）概要

本年度の学校ボランティアへのボランティア依頼件数は、仙台市教委から 82 件（同一学校からの依頼でも、活動内容が異なる場合には別件扱い）、第一高等学院仙台校からの依頼が 1 件であった。このうち、15 件にボランティア活動学生を派遣した（達成率 18%、昨年度比-3%）。活動学生の人数は 26 名（実数）であった。派遣先の学校の内訳は、小学校 6 校、中学校 7 校、中等教育学校 1 校、高等学校 1 校であった。詳細は表 3 に示した。

活動内容については、学習指導補助活動が多いことが特徴である。仙台市教委の先生によれば、学校の先生方は東北大学生の学力面に対する期待感を強く持っている傾向にあるとのことであった。故に、学校ボランティアへの依頼は、国語・算数・理科・

社会・英語の教科指導補助や、長期休みに開催される勉強会の補助、放課後や休日に定期的実施される補習における個別指導などが中心となっている。配慮を要する児童への支援や部活指導等に関する依頼も増加傾向にあるが、「学生サポートスタッフ事業」に参画している他大学と比較すると、相対的に依頼の割合が少ないのも東北大学の特徴といえる。

表 3. 活動学校一覧と活動者数

活動学校	人数（のべ）
上杉山通小学校	1
木町通小学校	2
榴岡小学校	3
通町小学校	1
西中田小学校	1
八木山小学校	1
郡山中学校	1
将監中学校	2
第一中学校	2
東華中学校	1
富沢中学校	7
八乙女中学校	3
八木山中学校	1
青陵中等教育学校	2
第一高等学院	1
合計	29

活動学生について、その内訳を表4、表5に示した。特徴として、①教職課程履修者が中心であること、②教育学部生が最多だが、理系学部（特に農学部）生も多くいること、③学年は、履修授業の多い1・2年生よりも、3年生以上の学生が中心となっていること、などが挙げられる。特に②については、本活動を全学的な活動とすることの意義を感じることができる。

表4. 活動学生人数・所属別

学部（大学院含む）	人数（実数）
文学部	2
教育学部	9
経済学部	1
法学部	1
工学部	5
理学部	2
農学部	6
合計	26

表5. 活動学生人数・学年別

学年	人数（実数）
学部1年	4
学部2年	0
学部3年	8
学部4年	5
大学院・その他	9
合計	26

（2）活動学生による各学校でのボランティア活動報告

①Nさん（教育学研究科・博士課程前期1年）

【活動時期】 2011年4月～2012年3月

【活動内容】 体験学習の引率や、授業の補助を行った。学年は特に決まっておらず、その日に校外学習や、特別活動のある学年について。イベントの手伝いも行った。

【意見・感想】 子どもさんたちと関わることができ、慕ってもらえるのがとても楽しい。子どもさんたちと上手くコミュニケーションを取っていく勉強になる。また、先生方が子どもさんたちとどうコミュニケーションを取るのか観察するのはとても勉強になる。私の場合、活動できない月の方が多くにも関わらず、温かく迎えてくださる学校の先生方には感謝の気持ちでいっぱいである。

②Yさん（工学部・3年）

【活動時期】 2011年4月～2012年3月 隔週土曜日

【活動内容】 全学年を対象として、中学生の学習支援ボランティアを行った。

【意見・感想】 教職の授業をとっているが、大学の講義だけでは得られない、実際の学校現場を見ることができ、何より子どもと接するのが好きなのでとても貴重な経験となっている。自分の良い体験の場となっているので、その分、子どもたちに少しでも今まで自分が得てきたことを還元したいと考えている。

③Sさん（教育学部・3年）

【活動時期】 2011 年 9 月～2012 年 3 月

【活動内容】 主に外国語活動のティーチングアシスタントとして、子どもたちのコミュニケーション能力の素地の育成を目指し活動させていただいている。外国語活動がないときでも、5 年生や 6 年生の授業のお手伝いをさせてもらったり、食育の一環としておこなっている稲刈りを保護者の方とも一緒に体験したりしている。

【意見・感想】 このように教育現場に数多く携わることは、大学の講義で学んだ内容を何倍にも高めてくれた。また、教育現場から生じた疑問を今後の学習課題にすることもできた。学校ボランティアは学校現場の負担軽減だけでなく、学生の大学での学びの質を向上させる効果的なシステムになっているように感じる。今後、活動の規模の拡大と質の向上により、大学が産学連携とはまた違った形で地域に貢献できることを願う。

④ A さん（教育学部・1 年）

【活動時期】 2011 年 9 月～2012 年 3 月 毎週木曜日

【活動内容】 小学 1 年生のあるクラスの担当になり、1 校時から 4 校時、T・T のような形で授業に参加して活動させていただいた。後半はそのクラスのなかでも配慮の必要な児童に、ある時は違うクラスの配慮の必要な児童につきっきりになって活動した。

【意見・感想】 半年間毎週同じクラスに通って、個人個人だけでなく、クラス全体が成長していく様子を実感することができた。話の聞き方、友達との付き合い方など、子どもの成長はこんなに早いのかと目を見張った。教師の視点に立ってみて、先生方の仕事は教壇に立つ以外にもこんなに多いのだと初めて知り、本当に大変だなと思った。1 年生はおんぶや抱っこが本当に好きで、体力的に大変なことが何度かあった。1 対 1 の対応というのは難しいものがあったが、貴重な体験をさせていただいた。いつかまた機会があれば、ボランティアとして、教育現場に携わりたいと思う。

⑤ E さん（教育学研究科・博士課程後期 3 年）

【活動時期】 2011 年 9 月～2012 年 3 月 毎週金曜日

【活動内容】 金曜午前の体育の時間に、中 3 男子 1 人の相手をするのであった。対象生徒は、体育の授業にまったく参加できないため、授業中は体育館の内外を徘徊していることが多かった。そのため、教員の目が届かないことがあるので、生徒に危険が及ばないように見ている役割を担った。

【意見・感想】 男子生徒と初めて会ったときは、近づけば逃げるという状況であり、通常のコミュニケーションがまったく取れなかった。学校の教員からは、慣れてくれば普通に会話はするということが伺っていたが、普通の会話や、ボールを使つてのキャッチボールが可能になるまでに、およそ 1 ヶ月を要した。粘り強く接することで、最終的に私にも心を開いてくれたと感じている。私にとっても対象生徒にとっても心を開く練習の機会になったと思う。同時に、

ボランティア側にはこのような生徒・児童の行為にどのように対応したらよいか考えておく必要があると感じた。

⑥ Tさん（農学部・1年）

【活動時期】 2011年11月～2012年3月 毎週土曜日

【活動内容】 特別支援学級が行っている休日の活動のサポートをした。

【意見・感想】 子ども達が皆一人一人全然違う性格や趣味をしていて子どもとつきあうのは本当に一筋縄ではいかないと感じた。しかし彼らは私をクラスに温かくむかえ入れてくれて大変ながらも楽しく活動できた。

⑦ Sさん（経済学部・科目等履修生）

【活動時期】 2011年11月～2012年3月 毎週火曜日

【活動内容】 中学校で社会の授業を見学させて頂きながら、生徒のサポート（配布や教材の運搬など）を行っている。

【意見・感想】 クラスによってその雰囲気が大きく異なる事に驚いた。同じ内容でも、積極的に発言する生徒の多いクラスと、指されても「解りません」と答えるばかり、というクラスの違いは大きかった。自分自身、生徒や授業に対し積極的にかかわろうと努めているつもりだが、実際にどこまで行動したら良いのか戸惑うことがある。あまり話しかけすぎると、かえって迷惑になってしまうかもしれないと思うと、二の足を踏んでしまう。

⑧ Yさん（工学研究科・博士課程前期1年）

【活動時期】 2011年12月26日・27日、2012年1月5日

【活動内容】 冬休みの短期の活動で、対象学年は中学1年から3年で、生徒の学習補助を行った。

【意見・感想】 学習補助における生徒の参加は任意なので、来た生徒は皆熱心に課題に取り組んでおり指導しやすかった。低学年の基本事項の指導から受験を控えた3年生まで指導範囲が広く、普段体験することのない経験ができて良かった。

⑨ Yさん（工学部・1年）

【活動時期】 2011年12月26日・27日

【活動内容】 中学生の冬休みの宿題に関する質疑応答をするものであった。

【意見・感想】 丁度部活動の時間と重なってしまったようで、生徒さんの数は1日目が7人、2日目が3人程度と少なかった。理系科目に関する質問をする生徒さんが多く、2年生、3年生中心に来ていたようであった。基本的に生徒さんから自発的に質問があるというわけではなく、こちらから聞きに行くと質問をしてくれるというスタイルが多かった様に感じる。この時期の

受験生のモチベーションを下げないようにと言葉を選んで応答するように心がけた。2 日間という短い期間であったが参加できて良かった。

⑩Hさん（農学部・3年）

【活動時期】 2012年1月5日・6日

【活動内容】 中学生の学習を支援するというものであった。具体的には、各自の課題を持って集まった生徒が勉強するのをサポートし、わからない問題を教えてあげるということをした。

【意見・感想】 学習支援ボランティアをするのは初めてだったので緊張したが、中学校の先生方がとても温かかったので、安心してボランティアをすることができた。実際に教えてみると、わかることと教えることの違いを実感した。また、わかりやすく教えることの難しさを感じ、わかりやすい教え方は生徒によっても異なることを感じた。今年の教育実習を前に、良い経験ができたと思う。また、ボランティアを通して他大学の学生とも交流できて良かった。

⑪Wさん（農学部・4年）

【活動時期】 2012年1月5日・6日

【活動内容】 冬休み中の中学生の学習支援を行った。両日とも、9:00～9:50、10:00～10:50、11:00～11:50の間、生徒が持参した課題に取り組むのを見て回り、手が止まっている生徒や考え込んでいる生徒がいたら指導した。

【意見・感想】 今回、1クラスあたり生徒20～30人、ボランティア学生2～3人であったが、もう少しボランティアが多いほうが効率的だと思った。初日は緊張している様に見える生徒も2日目は質問してきたりと、数日重ねることでより良い会になることを感じた。

（3）平成 23 年度「学校ボランティア」感謝状贈呈式・活動報告会

【開催日時】 2012年2月9日 13:00～15:00

【参加者】 活動学生5名、事務局員2名他、計11名

【場所】 東北大学川内南キャンパス・文科系総合研究棟202教室

【内容】 本年度における活動学生から任意の参加を募り、仙台市教委、事務局、および活動学生の交流の場とした。具体的な内容は、仙台市教委の担当者からの感謝状贈呈、事務局からの年間報告、活動学生代表者による活動報告、意見交換を含む談話による交流会であった。

【参加した活動学生の感想】

○他の方々が行っている活動をしているのが聞いて楽しかった。



- こういう活動者同士でのコミュニケーションの場があるといい。
- 自分が体験した活動以外の実情を少しでも知ることができて良かった。
- 教育委員会の先生のお話で、教育現場の状況を知ることができて良かった。

【事務局担当者の反省・課題】 昨年度に引き続き、本年度も活動学生同士じっくり話をする機会を持てたことが何よりの収穫であった。また、活動学生と仙台市教委の先生との交流の場として、互いの現状を理解し合える良い機会となっていると感じた。さらに事務局としてはこの会を開催するにあたり、学校ボランティアの一年間の活動全体を振り返ることができた。課題は、25名以上いる活動学生の中で今回参加してくれたのが5名のみであったことである。来年度以降、より多くの活動学生に参加してもらい、幅広く意見を交換し合える会にしていくための方法を検討しなければならない。また、今回活動者の声を聞いていく中で、年度末に活動全体を振り返る機会だけでなく、年度途中、活動期間中の意見交換、相談会などを実施する意義・必要性を感じた。これらは活動学生と事務局の関係性向上のためにも、重要な検討事項であると考えている。

3. 平成23年度「学校ボランティア」事務局活動の改善点

本節では、昨年度までに挙げられていた課題について、本年度行った主な改善点を示す。

(1) 学校ボランティア登録者名簿の整理とメーリスの活用

学校ボランティアでは従来、学校ボランティア登録者名簿に登録した学生のみを対象に、募集依頼情報を提供する「登録制」により募集を行っていた。しかし、従来の方法では、「とりあえず登録だけしておく」という学生も多く、登録者の数に比して、実際に活動する学生数が少ないことや、名簿管理の煩雑さなどが課題であった。また、より多くの学生が募集情報を見ることができるようにと、本年度からは「公開制」に移行した。

具体的には、川内北キャンパス内の掲示板に募集を掲示し、あわせて、募集依頼内容を配信する「メーリングリスト」を設置した。そして、実際に活動する際に、改めて活動学生としてより詳細な情報を「登録」するようになった。

このように、「情報を得る段階」と「実際に活動する段階」を差別化した事により、情報はより簡単に得ることができ、かつ、実際に活動する際にはより当事者意識や責任感を持って活動に臨むことができるようになったのではないかと考えられる。

2012（平成24）年2月現在、メーリングリスト登録者は35名であり、昨年度まで使用していた登録者名簿の233名（2011年2月）に比べて大幅に減少している。しかし、従来の登録者名簿には卒業推定者や他所属不明の者も多数含まれていたことや、実際の派遣数（達成率）にはそれほど大きな減少が見られないことからすると、より効率のいい募集が可能になったといえる。また、35名のメーリングリスト登録者のうち、旧・登録者名簿からメール配信の継続を希望する形で登録された者が10名、活動希望と同時にメーリングリストへ登録した者

が 2 名、それ以外の新規登録者が 23 名であった。昨年度までの多くの登録学生のうち、継続して募集情報の配信を希望してくれた者が少なかったことと、その数の 2 倍以上の者が新規に登録してくれたことを考えると、ボランティア活動により具体的に興味を持つ学生がメーリングリストに登録している状況にあると考えられる。今後、メーリングリストによる募集の効果が期待されている。

(2) 仙台市教委による活動説明会実施方法の工夫

仙台市教委の先生方から、学生サポートスタッフ事業の概要や保険等についての説明が行われる「学生サポートスタッフ研修会」は、例年、登録学生および登録希望学生を対象に、仙台市教委の先生方と事務局がそれぞれ説明を行うものであった。しかし本年度からは、事務局員が仙台市教委より研修を受け、実際の活動学生には事務局員がこの説明を代行する形をとった。これは、例年、年度当初から活動を開始する学生よりも年度途中から活動を開始する学生のほうが多く、活動希望者が現れる度に仙台市教委の先生による研修を行うことが難しい現状を考慮してのことである。

また、事務局による説明の代行は、活動希望者と個別に顔合わせを行う機会となり、事務局員にとっては、どのような学生が活動を始めるのかを把握するために重要なものとなっている。さらに、一度顔合わせを行っておくことで、活動中に問題が発生した場合に、学生が事務局に相談しやすくなる効果も期待されている。

ただしこのことによって、仙台市教委の先生方から学生に対して直接説明を行っていただくことで、公的な活動であることの意識を学生にもってもらえることはできにくくなった。事務局員が学生へ説明をする際は、この点をきちんと踏まえていきたい。

4. 今後の課題

(1) ボランティア活動学生・依頼学校に対して

事務局による活動学生へのサポートについて、本年度までは活動学生との繋がりを強化することに取り組みられてきた。これは、活動について困ったことがあった際は事務局に相談してもらえるように呼びかけるための、基盤として最低限必要な関係性の構築であったといえる。今後は、そのような取り組みを継続しながらも、学生の声を受け身に待つばかりではなく、事務局からもより積極的な働きかけを行っていく必要がある。それについて、まず、メール連絡を行うだけでなく、活動の状況について、全活動学生それぞれから定期的に話を聞く機会を設けることが有益であると考えられる。その上で、より実践的なサポートとして、近年東北大学への依頼も増加している特別支援系の活動について、活動学生が困惑することのないように相談会の企画や参考書の紹介を行ったり、通常の学習支援活動についても、初めにどうしていいかわからない学生のためのアドバイスをしたりできるような機能を事務局が有することも必要かもしれない。

また、学校ボランティアは年度ごとの活動であり、年間を通しての活動も年度末でいったん終了となる。場合によっては、次年度以降も同じ学生が活動を継続することもあるが、その際は、年度初めに再度、活動学生としての登録をしなければならない。この点について、学校および活動学生の理解を促す必要がある。なぜなら、学校および活動学生においてこの認識が曖昧であるため、年度初めに、事務局で活動継続者を把握しきれないうちに活動が再開されている事例が毎年度見られるためである。この問題は、何かトラブル等が発生した際に、ボランティア保険の対応が遅れてしまう、事務局のサポートが行き届かないなどの事態を引き起こす重大なものである。そのため、学校や活動学生の意識喚起のための取り組みを行うべきであろう。

(2) ボランティアを希望する学生に対して

本年度における事務局の活動では、昨年度から始まった SLA サポート室との連携がより強化され、全面的な協力をいただいた。その1つとして、スタッフが常駐する SLA サポート室を事務局の窓口として提供してもらうことで、全学部の学生が通う川内北キャンパスにおける積極的な募集が可能となり、また、活動を希望する学生も、活動に向けて一歩前に踏み出しやすくなったのではないかと考えられる。

その一方で、川内北キャンパスに通う学生の多くは学部1・2年生である。活動学生の中心が3年生以上であることを踏まえると、全学教育が行われる川内北キャンパスだけでなく、他キャンパスにも積極的に広報活動の範囲を広げていくことで、学部専攻に分かれた学生にも広く学校ボランティアを知ってもらうことができると考える。具体的には、他キャンパスの講義棟等へのポスターの貼りだしや、3年生以上を対象とした各学部の教職科目における告知などが考えられよう。

また、本年度は十分に活用することができなかったホームページの機能を整備することで、学生がより気軽に学校ボランティアに関する情報を入手することができるようにすることも必要であると考ええる。

(3) 事務局運営について

現在、事務局員数が非常に少なく、今後の事務局運営の維持が危ぶまれる状況にある。本年度初頭においても事務局員募集を行ったが、その取り組みの効果は得られていない。そのため、来年度に向けて、事務局員募集についての案を早急に講じる必要がある。ある程度の事務局員数を確保することで、ボランティア活動学生へのサポートや募集・広報活動をより積極的に行っていくことが可能になると考えられる。今後、新たな事務局員を募集し、育成することで、学校ボランティア事業をより安定かつ充実したものにしていくことが望まれる。